

有明ニュース



癌研有明病院

The Cancer Institute Hospital of JFCR



平成 22 年 6 月号 No.7

〒135-8550 東京都江東区有明 3-8-31

TEL 03-3520-0111(代表)

(URL): <http://jfc.or.jp>

手術室の新設について

副院長 山口 俊晴

癌研究会附属病院が癌研究会有明病院として、この地に新設移転してわずか5年で、なぜ手術室の増室が必要になったのでしょうか。この移転計画は実際にはおよそ11年前に策定されたものです。当時の医療事情から設定されたのが、700床の病床数と、それに見合う14の手術室だったのです。当時は胃癌や大腸癌の手術のために入院する期間は、およそ1カ月前後でした。入院しながら検査を進め、診断がついて治療に取り掛かることも多い時代でした。ところが、最近は、診断や治療のための検査のほとんどすべてが外来で行われ、入院するのは手術の1~2日前のことが多くなりました。また、手術が終了して退院するまでの期間もほとんどが10日前後に短縮されました。そのために、診断がついて病室が空いていても、手術室が空いていないために、入院できない状況になってきました。もちろん癌は診断がつき次第、出来る限り迅速に治療に取り掛からなければなりません。ところが、上記のような事情で、当院ではおよそ800~1000人の患者さんが入院待ちの状態にありました。



そこで、病院として手術室の増設の可能性を検討したところ、医療機器の保管庫として使用されていたスペースに、手術室を新設することが可能になりました。もともとこのスペースは手術室として設計されましたが、機器の保管庫が不足したため転用されていた経緯があります。そのため、工事も予想以上に順調に進み、2010年1月から当院の手術室が1室新設されました。この結果、年間およそ500件の手術を新たに行うことが可能になりました。新設された手術室には、最新のLED无影灯が導入され、最近急増している腹腔鏡や胸腔鏡などの内視鏡を使った手術が行われています。手術の待ち時間も短縮されつつあり、より多くの癌患者さんの治療が可能になりました。

手術室の新設工事費用および機器設備費用として、およそ１億円の経費がかかりました。そして、手術室増設の趣旨に賛同していただいた方々からは、総額 １千１百万円の尊いご寄付をいただきました。紙面を借りて改めてお礼申し上げます。また、当院での加療を



希望する患者さんが急増しており、その要望にこたえ当院の技術と設備がフルに患者さんの役に立てるように、さらに手術室を増設することも計画されております。今後もより一層のご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

「風薫るさわやかな季節となり・・・」

医事部 医療連携室 室長 市川 雅也

前任の田中医療連携室長の健診センター副所長への異動に伴い、２０１０年４月１日付けで医療連携室長を拝命致しました市川です。

当会入職から２０年あまり、長い間医事部にて医療請求業務や入院患者さんへの対応を続けて参りましたので、医療連携については初めてのことばかりで戸惑っており毎日勉強の日々ではありますが、新鮮な毎日でもあります。

さて医療連携室につきましては、現在も地域の各医療機関の先生方をはじめ、連携登録医の皆様のご協力を頂きながら、より良い医療連携を求めて職員一同頑張っております。今年度の診療報酬改定によりがん連携拠点病院等を中心とした連携を評価する保険点数が設定され、地域連携が脚光を浴びてきております。

今後は前方連携もさらに強化し、後方連携という大きな課題に向けても職員一丸となり取り組まなければならないとの想いを胸に、多くの医療機関とさらに強い結びつきで患者さんへの安心を提供できればと思っています。今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

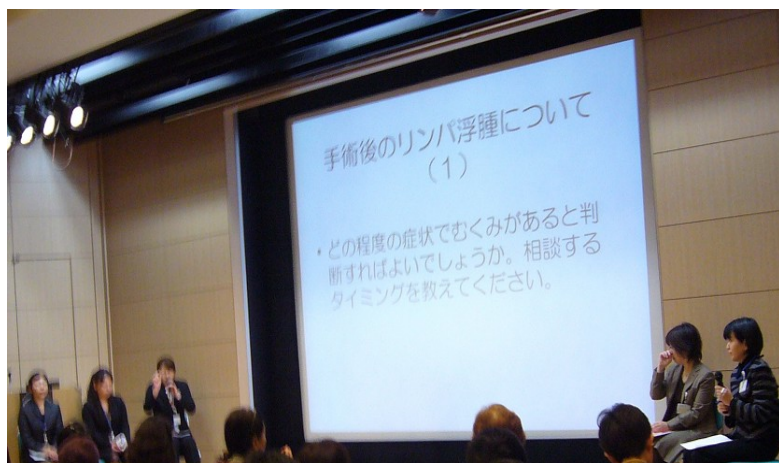
「一般公開講座を開催して」

看護部 がん看護支援委員会
乳がん看護認定看護師 武石優子

がんを診断された患者さんは治療を受けるとともに、仕事や家庭での役割などこれまでの日常生活を変更・調整しながら過ごしていくことが求められます。私たち看護師はこの

ような患者さんや家族に対し、治療やそれに伴う副作用、後遺症などをコントロールしながら生活ができるように療養環境の調整・サポートや情報提供をする役割を担っています。

今回、より多くの患者さんや家族の方々に、がんと上手に付き合いながら生活を送るための工夫や情報の提供を目的とし、3月6日（土）、吉田記念講堂において一般公開講座を企画し開催しました。企画は看護部 がん看護支援委員会が担当し、乳がんを例にして①化学療法の基本知識、②手術後の生活、③化学療法と上手に付き合うためのヒント、④緩和ケアとは、⑤病院の中のサポーター、⑥Q&A というプログラムで、治療・療養環境を患者さんが自分らしく生きるために必要な情報提供となるように工夫しました。



講演後の質疑応答の時間には、参加者から寄せられたたくさんの質問の中から代表的なものをスライドに示し、専門看護師・認定看護師が解説しました。

当日はあいにくの天気にもかかわらず 153 名の方々にご参加頂き、（事前申し込み者は 174 名）関心の高さを目の当たりにしました。限られた時間のため質問は用紙に記入して頂いた中から選出して返答する形式となりましたが、手術後のリハビリテーションやリンパ浮腫のケア、術後の創部痛、化学療法中の嘔気、白血球減少時の食事に関することに質問が多く寄せられました。参加した患者さんの中には、他の参加者からの質問内

容が参考になったという感想もありました。いただいた質問の中には普段私たち医療スタッフが繰り返し患者さんにお話しているつもりでいた内容もあり、十分に理解が得られていなかったことを痛感しました。

また、担当医に質問をしたいがどのように尋ねたらいいかわからない、説明された内容が理解できない、などでお困りになっている患者さんやご家族には、認定看護師や専門看護師というスキルをもった人材が活用できることを、病院の中のサポーターという話の中でご理解を得ることができました。

現在、外来通院をしている患者さんや家族の方々より、時間をかけて詳細に説明することを望む声が聞かれますが、限られた時間では対応が難しいこともあります。しかし、今回のように沢山の方々が参加できる機会を提供することで、多くの情報や生活上の工夫などを紹介することができます。終了後のアンケート結果から、今後も継続してこのような会を継続して開催することを希望する意見が多数寄せられました。今後の活動につながるご意見を頂戴しましたので、がん看護支援委員会といたしましては、疾患別に治療・療養環境に視点を置いたお話を定期的に企画・開催できる体制を整え、ご案内できるようにしていきたいと思っています。

消化器センター消化器外科の紹介

外科スタッフ



山口 俊晴
消化器センター長
兼消化器外科部長
兼 副院長



佐野 武
(上部消化管
担当部長)



齋浦 明夫
(肝胆膵
担当部長)



武藤 徹一郎
(メディカルディ
レクター
兼 名誉院長)



中島 聰總
(顧問)



上野 雅資
(副部長)



比企 直樹
(医長)



福長 洋介
(医長)



長山 聡
(医長)



関 誠
(医員)



大山 繁和
(医員)



山田 和彦
(医員)



古賀 倫太郎
(医員)



藤本 佳也
(医員)



布部 創也
(医員)



小西 毅
(医員)



峯 真司
(医員)

その他スタッフ

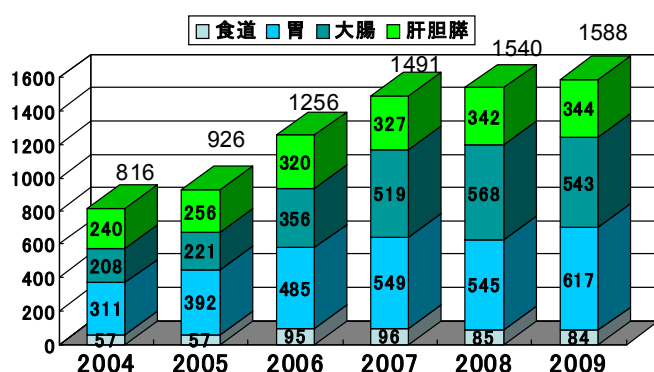
秋吉高志、岸 庸二、愛甲 丞、熊谷厚志、
竹村信行、渡邊良平、野原京子、山川景子、
窪田 健、吉岡龍二、野秋朗多

消化器外科は主に 3 つのグループに分かれて、診療・研究を行っています。食道、胃のがんを治療する上部消化管グループ、主に大腸(結腸と直腸が含まれます)のがんを治療する下部消化管外科グループ、そして肝臓、胆嚢、膵臓などのがんを治療する肝胆膵外科グループです。有明に移転してから、いずれのグループも症例数年々増加し、現在もさらに増え続けています。

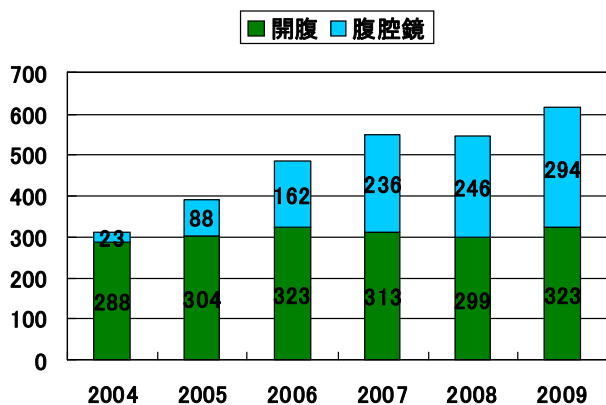
癌研の外科はもともと、転移の可能性のあるリンパ節を広く取り除いたり、進行して切除の難しいがんを高い技術力で切除することに力を注いできました。有明に移転してから

はこのような進行がんに対する技術をさらに磨くだけでなく、最近増えてきた比較的早期のがんに対する、患者さんの負担が少ない新しい手術の導入も積極的に行ってきました。その結果、腹腔鏡という内視鏡で観察しながら、おなかを大きく切らないで胃がんや大腸がんを切除する、腹腔鏡手術という技術の分野では日本でもっとも多い症例数があります。

消化器外科手術件数



癌研における腹腔鏡下胃がん手術

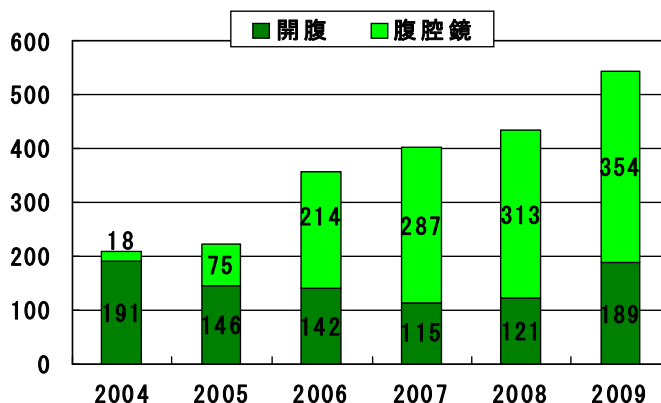


腸のがんは、骨盤の深いところにあるために普通の開腹手術では操作が極めて難しいのですが、腹腔鏡を使用することでよい視野できちんとした手術が可能になりました。また、内科の内視鏡と協力して、より確実に病巣を切除できる LECS（腹腔鏡－内視鏡共同手術）という、チーム医療を実践してい

この新しい技術の習得に、国内はもちろん中国、韓国、台湾やヨーロッパ諸国から見学者が多数訪れています。また、癌研の腹腔鏡手術の高い技術を求めて、アジア諸国、欧米からも患者さんが治療に訪れており、年々増える傾向にあります。最近では肝臓や膵臓の手術にも、腹腔鏡が導入されて、患者さんの負担の少ない手術の確立に向けて研究が進められています。

腹腔鏡手術は患者さんの負担が少ないだけでなく、手術の難しい狭い、深い部位のがんの手術に力を発揮します。たとえば、大腸がんの中でも直

癌研の大腸がん手術件数



る癌研ならではの、新しい技術も開発されています。チーム医療という意味では、大腸グループと協力して、肝胆膵外科グループは大腸がんの肝転移に対しても積極的な切除を行い優れた治療成績を上げています。さらに、最近は化学療法ของกลุ่มとも協力し、これに抗がん剤を加えることで、さらに助かる率を高める研究も行われています。

新しい手術室ができたことで、いずれのグループも最近では2～3週間以内に手術が可能な状態になりました。早期のがんばかりでなく、がんがひどく進行していても、転移があっても、消化器外科は消化器センターの内科グループと協力することで、総合的な治療を行いより多くの患者さんが助かるように努力を続けています。いつでも、ご相談ください。

■医療機関向け お知らせ ■

先生方へご案内

医療連携室では、医療機関の先生方からご紹介患者様の診察(セカンドオピニオン)予約の予約調整を行っております。また、経過報告書の管理、診察に関するご案内等を行っております。お問い合わせの窓口としてご信頼いただけますように、迅速・確実な対応を心がけて行きます。ご紹介方法は、電話・FAXでお申込みいただけます。(また、患者様自身にお電話いただき予約することもできます。)

電話:03-3570-0506(医療機関様用)

03-3570-0541(患者様用)

FAX:03-3570-0254

連携医療施設の登録のご案内

当院との医療連携が密接な医療機関に、「連携施設」となっております。連携施設にご登録いただけます先生方は、医療連携室へ電話もしくはメールにてお問い合わせください。まずようお願いいたします。当院は、地域医療機関と協力して地域医療の推進に努めます。

連携施設 265 施設 (2010年4月30日現在)

看護師募集中です。

日本で最初にできたがんの専門医療機関として「患者さんのための医療」に力を尽くしています。さらに医療の質を高めたいと考えております。

あなたのやさしさを『がん看護』に・・・まずはお気軽にお電話下さい。

ご応募お待ちしております。

お問合せ先 ☎03-3570-0398(人事課) ☎03-3570-0392(看護部)

財団法人 癌研究会有明病院 発行: 医療連携室

TEL 03-3570-0506 FAX 03-3570-0254

(E-mail): renkei@jfc.or.jp